

2013年2月15日

週刊現代

「日本が世界に誇る二百年企業の研究」

二百年企業になるための知恵とは 新聞を発行して情報を発信

「発信し続けることで情報が集まる。そこから時代の兆しを読み取ってきた」と中村さん。台湾などの留学生に養蜂技術を教え、1915年には養蜂情報の新聞を発行した。その姿勢が

身を助ける。'63年の蜂蜜の輸入自由化で安い商品が入ってきて生産が激減するが、秋田屋で技術を学んだ台湾や中国の生産者の協力で、海外にも拠点を持つことができたのだ。

→(上) 巣箱から巣を取り出す。もともと材木商として扱っていた秋田杉で、巣箱を製作したことが、養蜂業を始めたきっかけ。(下) 蜂は板状の巣1枚につき約2000匹いるという
↓巣礎の製造の様子。天然の蠟の板に、六角形の型をあけていく



秋田屋本店

ミツバチにこだわり
新商品の開発に力を入れる

- 本社所在地 / 岐阜県岐阜市
- 業種 / 養蜂関連事業
- 創業 / 1804年(文化元年)

日本が世界に誇る

二百年企業の研究

200年前の日本は江戸時代。その時代に創業し、今も経営を続ける企業がある。明治維新や戦争などの危機に耐え、暖簾を守ってきた企業の強さとは何か。

包丁の製造・販売をする和泉利器製作所(1806年)の御治所。同社は万代の出、大阪・堺で1805年に創業した。



昔の新聞。今は冊子を発行している

↓9代目社長の中村正さん。岐阜県内に6つ目の工場を新設中だ



創業当時は材木商だったが、1887年に養蜂関連の仕事 시작했다。9代目の中村正さんは「秋田屋の歴史は商品開発の歴史」だと語る。日本の近代養蜂の始まり

に、蜂の巣の土台となる六角形の「巣礎」を作り、女王蜂の品種改良や、国内でいち早くローヤルゼリーの生産に着手するなどした。現在、巣礎は国産品シェアの7割を誇るほか、蜂蜜を使った化粧品や医薬品の開発に力を入れる。「基本がミツバチなのは変わりません。その中で、時代や顧客が求めるものを作り続けています」(中村さん)